学苑　第八七四号　一～七（二〇一三・八）

『恋路ゆかしき大将』と『風に紅葉』との類似性を中心に

大倉　比呂志

一

『恋路ゆかしき大将』（以下、『恋路ゆかしき』と略す）と『風に紅葉』との関係については、辛島正雄「『いはでしのぶ』の影響作―『恋路ゆかしき大将』と『風に紅葉』と」（『中世王朝物語史論』下巻所収　笠間書院　二〇〇一・9。初出、一九八六・3）が論じており、小稿では一部その指摘と重なる点はあるものの、両作品の類似性を中心に、その差異性をもいささか論じていこうと思う。

＊　＊　＊

①『恋路ゆかしき』の冒頭部において、故院の第一皇子で、「御容貌をはじめ御身の才まで世に賞でられ給」（1・一二）うた戸無瀬入道（源氏太政大臣であったが、故大臣女の北の方の死後、出家）は、母が大臣の娘で梅壺女御であったものの、大臣が死去したために、後見がなく、即位できなかったので、右大臣が一人娘と結婚させたのである。だが、式部卿宮女で非常に美しい姫君（後に藤壺女御・皇后宮となるが、藤壺女御の名称で統一する）を今上帝が入内させたいと思い、父宮もそのつもりで準備を進めていたところ、「いかに引き違へける御契りにか、あさましくて盗みきこえ給ひにしかば」（1・一三）とあるごとく、戸無瀬入道が略奪してしまったのだ。冒頭部で后がねが略奪されたことは、戸無瀬入道が即位できなかったという悔しさが契機になったとも考えられるが、冒頭部で〈女〉の略奪が語られている意味を看過してはなるまい。というのは、『風に紅葉』の冒頭部においても、男主人公大将（後に内大臣となるが、以下、大将と称する）の父親関白左大臣は故大臣女を北の方とするものの、今上帝（後に朱雀院）の女一宮を「いかにたばかり給ひけるにか、盗みきこえ給」（上・八）い、女一宮を寵愛した結果、北の方はそのショックで亡くなってしまうからだ。この点を重視すれば、両作品の発端が余りにも類似しているといえよう。すなわち、男主人公（ないしは、男主人公格）の父親が大臣の娘と結婚したにもかかわらず、高貴な姫君（姫宮）を盗み出すという点において類似した話筋で語られているということだ。そのうえ、戸無瀬入道は藤壺女御との間に端山・花染という二人の男君を儲け、大将の父親も女一宮との間に大将と妹の東宮宣耀殿女御（後に、東宮の即位に伴ない、弘徽殿中宮）の二人を儲けたわけだから、子供の数までが一致しているのである。両作品ともに『風葉集』に作中和歌が入集していない点からも成立の前後関係が確定しがたいが、それらに先行する作品として『浅茅が露』を見落としてはな

るまい。というのは、『浅茅が露』の冒頭において、帝の寵愛する大納言典侍が源中将に盗まれたと語られているからだ（二人の間に生まれた姫君は『風葉集』によれば、「尚侍」となった）。とすれば、『浅茅が露』ではいわば人妻的立場に位置するのが大納言典侍であり、『恋路ゆかしき』と『風に紅葉』においては盗まれた女が高貴な独身女性であるという差異はあるものの、これらの三作品における冒頭部の起筆の相似性には注意しておく必要があろう。そのうえ、女を盗んだ男が後に登場する主人公やそれに準ずる人物たちの父親であるという点においても共通性を有しているのだ。ちなみに、『浅茅が露』の和歌が『風葉集』に一〇首入集している点からも、これら二作品の冒頭部には『浅茅が露』のそれが影響を与えていると考えられよう。とすれば、『浅茅が露』におけるいわば既婚者をこれら二作品は未婚女性に置き換えることによって、新味を打ち出そうとしたのだ。

＊　＊　＊

②『恋路ゆかしき』において、

右の大臣の女御、承香殿と聞こゆるは、大将（恋路）にも忍びたる御仲なりける、それも上（帝）の御みちびきにぞありける。（1・一九）

と語られているように、帝の主導のもとで恋路（後に関白）と承香殿女御との情交が公認されているわけだが、『風に紅葉』では太政大臣の北の方自身が大将と情交を結びながら、大将を恋慕している継子で里下がり中の梅壺女御に大将との情交をけしかけているのである。[注①] けしかけた人物が帝と北の方という差異はあるものの、けしかけられたのは後に大臣になった人物であり、その対象者は女御であったという共通点を有している。

＊　＊　＊

③は②と関連する事項だが、継母と継子の両方に対する情交は、両作品において次のように語られている。『恋路ゆかしき』では恋路の北の方は前左大臣女であったが、その後「はなやかに色めかしき」継母（今北の方）は「一年（ひととせ）の五節より、あなたよりすすみて聞こえかかりたりし人」（1・二九）で、恋路に継母の方から積極的に接近したのであり、傍線部のごとく、いわゆる〈女すすみ〉であった。[注②] それに対して『風に紅葉』においては、大将は一品宮と結婚後、父親の兄である太政大臣から梅見の宴に誘われ、大将が「うち見やりきこえ給へるにほひありさまに、㋑魂もやがて消え惑ふばかり、現し心もなくぞ、上（太政大臣北の方）はおぼえ給」（上・一六）い、

「御賄ひを、宮仕ひ初めにも、それや」と、（太政大臣ガ）大臣の上に聞こえ給へば、ゐざり寄りて、銚子取りて奉り給へば、大将はゐなほりて、色許りて見ゆる女房を、「こちや、いかが、さることは」とのたまへど、㋺（北の方ガ女房ノ手ヲ）なほおさへて奉り給ふを、「さらば、また」とて（大将ガ）受け給ふほどの御気色、㋩（北の方ハ）ただ死ぬばかりぞおぼえ給ふ。（上・一七）

とあり、これを契機に二人は密会を重ねるわけだが、この直前に太政大臣が北の方との実娘を大将に与えたいという発言があり、それに対して大将を恋慕している北の方が嫉妬したとしても、㋑から㋩までの三個所の傍線部から北の方が大将に魅了されていく過程が看取されよう。この場面では、北の方に対して『恋路ゆかしき』の継母に使用されている「すすむ」ということばこそないものの、やはり〈女すすみ〉の状況であると考えられる。その後、北の方の継子に当たる梅壺女御は「（大将ガ）かく（太政大臣邸ニ）渡り給ふよし聞き給ふに、心も心ならず、（内裏ヨリ）急ぎ出で給ひてけり」（上・二〇）とあるように、梅壺女御の大将への恋慕を見て取った北の方は、

大将に里下がり中の梅壺女御との情交を勧め、大将はその申し出を渋るものの、北の方は大将を梅壺女御の部屋に案内する。情交後に、梅壺女御の方から先に大将に贈歌し、それは、

有明のつれなき影に先立ちてまた夕闇の心まどひよ

とむせかへり給ふ御気色も、逆さまごとなり。（上・二四―二五）

と語られているわけだが、梅壺女御の歌は帰って行く大将の姿を見るのが辛いので、大将にまた逢いたいと心を乱しながら夕闇になるのを待っているという内容であり、いわば梅壺女御の方から大将を口説いているのを、語り手が傍線部のごとく「逆さまごと」と戯画的に語っているのである。そこに梅壺女御の大将に対する強烈な恋慕が表象されているわけだが、「すすむ」というような直接的なことばは使用されてはいないものの、梅壺女御もまた〈女すすみ〉であることが顕在化しているのだ。このように両作品の〈女すすみ〉の状況が語られているわけだが、『恋路ゆかしき』では恋路との情交は継子が先で、継母が後であるのに対して、『風に紅葉』では大将との情交は継母が先で、継子が後であるという差異があると同時に、『風に紅葉』では継母である北の方が大将と継子との情交の場を設定しているのに対して、『恋路ゆかしき』においては継子が恋路と継母との情交の場を設定してはいないという差異のある点も注意しておく必要があろう。

＊　＊　＊

④『恋路ゆかしき』において、恋路の父親である関白左大臣の兄の致仕大臣は彼らの父故入道大臣が関白職を弟である恋路の父親に譲った怨みのために、三人の娘を連れて吉野に引き籠っていたが、七十歳を過ぎて、突如帰京した件は、

この人（吉野致仕大臣）世を怨むる心深くてかく行なひ過ぐす事、亡き（父親故入道関白ノ）御ため、わが御末々も、よからぬ事なりと（関白左大臣ハ）思して、帝にも奏し申し給ひて、しばしがほどにても名（注―関白の名称）をかけさせんと思し寄る。（1・三〇）

とあるように、関白左大臣が吉野致仕大臣に一時的に関白の地位を譲ったところ、吉野致仕大臣の歓喜した様子が「いみじうあはれなり」（1・三一）と語られている。このような状況は『風に紅葉』においても語られており、それは大将の父親に対する発言として、

「……かの太政大臣（注―大将の父親の兄）の、すでに六十におよび給ひぬるが、なほおほやけの御後見（注―関白職）なん、心にかかること、けに侍る。故大殿（注―大将の祖父である故関白）のこなた（注―大将の父親）へ譲りきこえ給へりけることは、おそれながら、御僻ごとにこそ侍りけれ。一日も、内裏にて、なにがし（注―大将のこと）をとく揺るぎなくなしてみたきとかや、奏せさせ給ひけるよし承る。かへすがへす当時あるまじきことになん。君（注―大将の父親）は四十にこそみたせ給へば、さは言へど、御行く末おはします。かの大臣の、いつの世を待つともなき頭の雪のつみ深うなん見給ふる。さて、（大将ノ妹宣耀殿女御腹ノ）一の宮、坊に立たせ給ひ、女御、立后など侍らん御栄華のころ、返りならせ給ひて、いつまでも御保ち侍れかし」と聞こえ給ふに、……（下・五四―五五）

とあるように、大将は父親に対して関白職を父親の兄の太政大臣に譲るように進言しており、その結果、譲られた太政大臣は「ものにあたりて喜び

まどひ給ふ」（下・五五）と語られている。

このように、『恋路ゆかしき』と『風に紅葉』とにおける関白職移譲の発案者に関しては、弟自身と甥という差異は見られるものの、それが実現された結果、兄は大喜びであったと語られている点からも、両作品の類似性を指摘することができよう。

＊　＊　＊

⑤『恋路ゆかしき』において、戸無瀬入道と梅津尼君との間に生まれた梅津妹君（後に藤壺女御。冒頭で語られている戸無瀬入道が盗み出した藤壺女御とは別人だが、混乱を避けるために梅津妹君と称する）の漢学の才能に関して、「男恥づかしきまでいかめしき御才学、唐の文の深き事どもいかでたどり知り給ふらん」（5・一六九）と恋路の視点からとらえられ、さらに、「殿（恋路）はなほこの学問のついでの（梅津妹君トノ）御あひしらひ思ひさましがたく思されて、しばしば夜更かし給ふを」（5・一七三）と語られているわけだが、[注③]『風に紅葉』でも故式部卿宮女の承香殿女御は父親から譲られて所有している多くの漢籍を帝に献上したために、帝は「なにくれの文・日記ども、ただこの女御に尋ねきこえさせ給」（上・二五）い、大将も承香殿女御付きの女房である宰相の君を通じて漢籍を見せてくれるように願い出たところ、快諾して、『文どもはさることにて、ことなる秘事、御みづからならでは』と返事をし、「書き付くる昔の跡のなかりせば思ふ心は知らせましやは」「いかにせん見るに苦しき君ゆゑに心は身にも添はずなりゆく」（以上、上・二六）という大将を恋慕する二首の歌を詠んで贈り、その後、大将は里下がり中の承香殿女御を訪ねて、情交に及ぶのである。このように、梅津妹君と承香殿女御が漢籍に深い知識を持っているのであり、そこに両作品の類似性を見るのである。

＊　＊　＊

⑥『恋路ゆかしき』の梅津妹君の異父姉である梅津女君と端山との関係を知った恋路の妹の中宮（後に皇太后宮）が激怒した結果、娘で端山と結婚していた女一宮（一品宮）の産んだ若君を端山のもとに送り返すという状況にショックを受けた端山は官を辞して戸無瀬に籠るのである（その後、院の斡旋により事態が好転し、皇太后宮によって端山と女一宮との結婚が正式に認められた）。そのような端山と女一宮との複雑な関係は「輪廻の業」（5・一八六）と語られている。それに対して『風に紅葉』においては、序文で「苔の下の出で立ちよりほかは、なにのいとなみあるまじき身に、せめての輪廻の業にや」（上・八）とあり、仏教的色彩の濃厚な語句である。このように両作品において同一の語句が用いられており、その近似性に注目しておかねばなるまい。この語句は管見に及ぶ限り、『源氏物語』にはなく、他の中世王朝物語作品でも使用されていない。

＊　＊　＊

今まで述べてきたように、『恋路ゆかしき』と『風に紅葉』とは内容上類似している個所が何個所も指摘できると同時に、[注④]⑥のような同一語句が用いられており、両作品の影響関係が考えられるわけだが、ともに『風葉集』に作中和歌が入集しておらず、現状においては、両者の成立の前後関係を確定できない。とすれば、同時代作品という枠組の中で考えていかざるをえないだろう。[注⑤]

二

『恋路ゆかしき』において〈性〉に関して大きな意味を持っているのは、梅津女君であるといえよう。彼女と結婚した按察大納言（後に内大臣）は

当然のことながら、恋路・端山・花染の三人の貴公子と帝をも手玉に取った梅津女君に照射すべきである。というのは、梅津女君について「淡々しく、いはでしのぶの宮の君めきて、よろづに移ろひやすくあだなるにもあらず」（5・二〇四）とはあるものの、梅津女君に魅せられた恋路の視点から、

いでや、内の上（帝）・大将（花染）などにもかくのみこそ（梅津女君ハ）心通はすらめ、あらあいなとうち思ひ冷まされて、……（5・二一一）

と語られているからだ。ここで『いはでしのぶ』の宮の君が取り上げられているわけだが、この宮の君とは、帥宮の姫君で、一条院左大将（後に内大臣）、二位中将（後に関白）と情交後に、白河院の寵愛を受け、女四宮を出産した女性である。また、『いはでしのぶ』は『風葉集』に三十三首（その他に詞書に一首記されているために、三十四首となる）の和歌が入集されているところから、『恋路ゆかしき』より以前に成立したと考えられ、梅津女君が宮の君の影響を受けて造型されたと思量される。[注⑥]

さらに、梅津女君と『むぐら』の女主人公である女君との類似点を述べていこうと思う。『むぐら』の男主人公大将の継母は、実娘の宰相姫君に男主人公の愛情を向けさせようとして、「空死」というヒステリー症状を引き起こし、それを口実にして、右大臣（後に太政大臣）の娘である女君（後に女御・女院）の所に行かせないという〈いじめ〉とでもいうべき意地悪な仕打ちを行った。そのうえ、二人の間に生まれた姫君が大将の父親のもとに引き取られた傷心のために、宇治にいる侍女の小母のもとに身を隠そうとする前に、宮中にいる妹の東宮御息所（後に中宮・女院）に別れを告げに参内した際、大雪で退出できなくなったのを帝（後に院）が垣間見て、中納言介の局に女君を取りこめてしまう。その結果、女君は行方不明ということになってしまったわけだが、それに対して『恋路ゆかしき』では、梅津女君にとっては異父妹である梅津妹君に会うために頻繁に参内した折、帝の目にとまって、按察大納言と結婚している梅津女君は不本意ながらも帝と隠れた関係を持つようになる。とすれば、『むぐら』の女主人公である女君と梅津女君とが、妹に会いに参内したところ、帝の目に触れて、帝との関係を持つに至るという話筋において類似しているわけだが、二人の女の生き方には落差があると考えられる。すなわち、『むぐら』の女君は帝寵がいくらまさっても嬉しいとも思わず、「女御（女君）の御心には、かかる（注―帝の第一皇子出産、女御の宣旨）につけても、大将殿の御事、忘るる世なくあはれなり」、「女院（女君）は大将殿の御事の、心に忘るる世もなきに」などとあるごとく、女君は世俗的な意味における栄華を極めているにもかかわらず、それは女君にとっては関心外のことであって、女君のことで懊悩した大将が死去した後も、女君にとって恋慕の対象は大将だったのだ。それに対して、「なほいかなる人のさまなればかく面々に迷ふらん」（5・一九七）、「今めかしきにのみ迷ふ片心やありけん」（5・一九九）とあり、梅津女君が五人の男を総なめにし、恋路・花染・帝の三人の男との三重奏的な可能性が推測される場面は次のように語られている。

（恋路ハ梅津女君ト）起き別るるほどもまた知らず悲しければ、出でがてに手をとらへて、いとあはれと思したるさまを、女も心ときめきしていとど思ひ乱れたり。大将（花染）は心も空に、あぢきなのさまやと、目も合はねど、いづ方とて疎かなるべきならねば、（恋路ガ）出で給ひぬるけしきを見て（梅津女君ニ）寄り来たるに、いといと面嫌はしく、これ（花染）をあはれと心交はしけ

んわが心も疎ましく思ひなられて、引き被きつつ、まことに荒々しく疎ましきさまに（花染ニ）思し疎まれんと振る舞ふを、（花染ハ）今更帰りて怨み嘆くほどに、上（帝）のおはしますけはひすれば逃げぬ。（帝ハ）もとよりだにこれはまた大将ほども覚えざりつる御人柄なれば、ともかくも思し疎め、天の下に置かれぬ身にもならなん、そはいかにと揉み焦がれて心憂ければ、なほ、わが身はいかになりぬるぞ、心ならぬ物の怪などの犯してあらぬ心の出で来ぬるかと、（梅津大君ハ）みづから疑はしきまで情けなくもてなしたてまつるを、……（5・二〇五―二〇六）

梅津女君は「あだあだしさ」（5・一九六、一九八）を持つ女で、「乱れ出で来ばかりなりし人」（5・一九九）であり、恋路の心中思惟を通して、その愛らしい様子は「色々の乱れもげにことわりなりけり」（5・二〇五）と語られてもいるのだ。そのような梅津女君の性的状況に対する反措定としての『兵部卿物語』における式部卿宮の姫君の男主人公である兵部卿宮（二宮）への対応の仕方を考えていく必要があるのではないのか。兵部卿宮は恋慕している式部卿宮の姫君と類似した女君に偽名を使って接近し、情交に至るわけだが、姫君が斎院に卜定されたショックで憂愁な状態にあった兵部卿宮は、周囲から強制的に右大臣女と結婚させられ、彼が訪れなくなった女君も右大臣女の女房として出仕するように乳母から勧められ、その乳母の死後、兵部卿宮に黙って出仕するわけだが、兵部卿宮がかつて偽名で女君のもとに通っていたことを知って、嵯峨野に失踪して出家を果たしたものの、それも兵部卿宮の知ることになったので、さらに奥深い栂尾に遁世して仏道修行に励むことになる。とすれば、梅津女君とこの女君との生き方が余りにも対照的であると考えられる。そこで成立の前後関係に注意を払ってみると、前述したごとく、『いはでしのぶ』の宮の君の造型が『恋路ゆかしき』の梅津女君に影響を及ぼしたと推察されるが、そのような好色者的な女の人生史に異を唱えたのが『兵部卿物語』における女君の生き方だったのではなかろうか。もちろん、『恋路ゆかしき』と『むぐら』における妹に会いに宮中に出かけて行った姉が帝を魅了させてしまったという場面の類似性は否めないと考えられるわけだが、そのような場面とは次元が異なるものの、『兵部卿物語』における仏道志向の女君のあり方は、梅津女君的な生き方を否定したものではなかろうか。

三

以上のように、『恋路ゆかしき』と『風に紅葉』『むぐら』との類似性、並びに『恋路ゆかしき』の梅津女君の生き方に対する反措定としての『兵部卿物語』における女君のそれに関して述べてきたわけだが、四作品とも『風葉集』に作中和歌が入集していない点から考えると、成立年次の前後関係を確定することは不可能で、それを同時代的枠組という流れの中で想定せざるをえないというのが現状である。その中で各作品間における類似性とそれに対する反措定という複雑で入組んだ構造を少しでも明らかにできればと考えている。

『恋路ゆかしき大将』『風に紅葉』『むぐら』の本文は中世王朝物語全集に拠り、『恋路ゆかしき大将』の算用数字並びに『風に紅葉』の上・下は巻、漢数字は各々の該当ページを示す。なお、表記の一部を私に改めた個所がある。

注①　物語文学ではないが、自分のいわば愛人二条をたとえば異母弟の性助法親王にけしかけた人物として『とはずがたり』の後深草院が想起される。詳しくは拙著『物語文学集攷―平安後期から中世へ―』（新典社　二〇一三・2）第三部の三を参照されたい。

②　〈女すすみ〉に関しては、注①前掲書第二部の三一を参照されたい。

③　梅津女君は「いま少し（漢学ノ）底を究め給へり」と語られている。また、母梅津尼君の祖父である某博士は「世に聞こえたりけるが、男子も持たで、ただ一人ありける女によろづを授けて、故大臣にさぶらはせけるを、御覧じ放たざりける腹になん、この二人（注―斎宮女別当と梅津尼君）は出でき給へり」（以上、5・一七〇）とあり、梅津女君と梅津妹君の二人の異父姉妹は漢学者の血筋を継承していると考えられる。

④　小稿で指摘した①④⑤は、既に前述した辛島正雄論文においても指摘されている。

⑤　辻本裕成「同時代文学の中の「とはずがたり」」（「国語国文」一九八九・1）。

⑥　梅津女君が帥宮の姫君と語られている点からも、『いはでしのぶ』の宮の君の影響を蒙って梅津女君の人物造型がなされていると『中世王朝物語全集⑧恋路ゆかしき大将』（巻五）の注でも指摘されている。

（おおくら　ひろし　　日本語日本文学科）